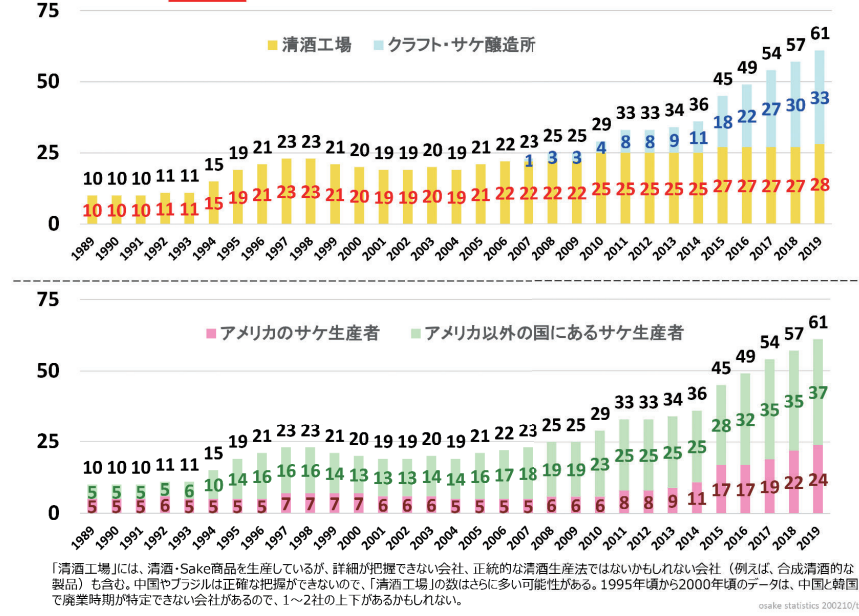


今回は、「Sakéと日本酒の30年」をご紹介します。

■ Fig.1 海外のSaké生産者数の30年



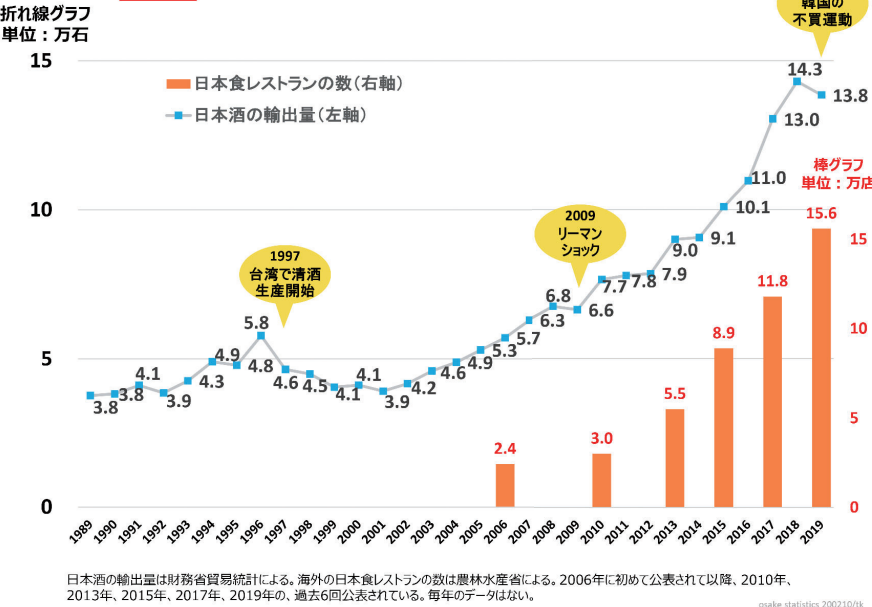
■ Fig.1 海外Saké生産者数の30年

1989年に10（アメリカ4社5か所、韓国3社、ブラジル2社）だった海外の清酒Saké（清酒）生産者数は、2019年に61と、30年で6倍に増えた。増加の背景には「クラフト・サケ醸造所」の存在がある。従来からある「清酒工場」（比較的大きな規模で清酒を生産し、びん詰め製品で広く流通・販売）に対し、「クラフト・サケ醸造所」は主に都市部で小規模に清酒を造って醸造所直売や地元中心で販売する、クラフト・ビールと同じスタイルの醸造所である。

上のチャートは「清酒工場」と「クラフト・サケ醸造所」に分けて30年の推移を見たもの。海外初のクラフト・サケ醸造所がカナダにできたのは2007年だが、以降、今までの12年間で33となり、すでに清酒工場の28を上回っている。

下のチャートは「アメリカ」と「アメリカ以外」に分けて30年の推移を見たもの。2019年現在、アメリカには5つの清酒工場と19のクラフト・サケ醸造所、合計24がいて、海外の総数61のうち4割がアメリカにあることになる。アメリカは、日本国外で唯一、70%や60%といった清酒製造に適した精米歩合の自国産原料米が手に入る国であることが、清酒生産者が多い理由の一つである。

■ Fig.2 日本酒(清酒)輸出の30年と、海外の日本食レストランの数



■ Fig.2 日本酒輸出と、海外の日本食レストランの30年

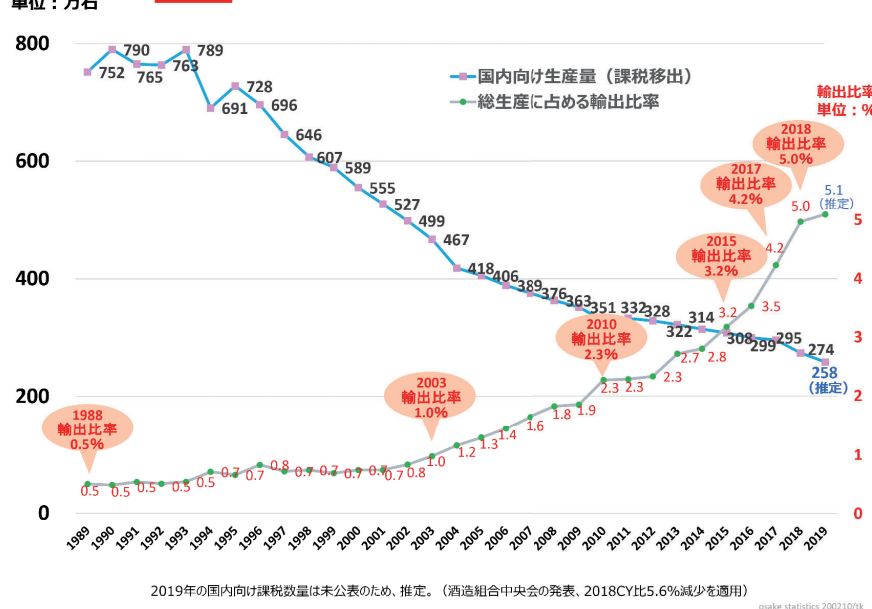
90年代前半の清酒輸出先の圧倒的トップは台湾で、日本の総輸出量の過半、当時2位のアメリカの4倍以上も輸出していた年もあった。台湾需要増加に対応して1997年に台湾国内で清酒生産が始まって、90年代後半は日本からの清酒輸出総量は減少した。21世紀になって再び増加に転じたが、それは4つの国が関係している。すなわち、アメリカで（90年代は自国製＝カリフォルニア製清酒が国内需要の多くを賄ったが、21世紀になって）日本製が消費されるようになり、次に日本酒輸入がほぼゼロだった韓国が輸入し始め、さらに香港で高級清酒の輸入量が増え、最後に2010年代になって中国向けが急成長し、今に至る。棒グラフから、2010年以降特に、日本食レストラン数の増加が日本酒輸出増の原動力になっていることが読み取れる。

30年間のグラフで、減少しているポイントは3つ、1997年の台湾の清酒内製化、2009年のリーマンショック、そして2019年である。

2019年8月以降韓国で日本製品の不買運動がはじまった影響で、2019年の韓国向けは46%減（1.35万石減）となった。韓国は2018年まで日本酒輸出先としてアメリカに次ぐ2位（量で）だったが、2019年は3位に転落。中国が2位に躍進したが、2020年は新型コロナウイルスの影響で、中国向けが減少に転じる可能性もあるだろう。

2019年の輸出先トップ5か国は、アメリカ、中国、韓国、台湾、香港（量の順）で、この5か国で総輸出量の75%、総輸出金額の79%を占める。

■ Fig.3 国内向け清酒生産量と、総生産に占める輸出比率の30年



■ Fig.3 国内向け生産量と輸出比率の30年

清酒の生産量はほぼ単調減少。2019年のデータはまだ公表されていないので推測値を入れているが、概ね30年前の1/3になった。このグラフは、国内向けの課税数量で、輸出向けの数量は含んでいない。

Fig.2の輸出量と国内向けを合算したものを総生産と仮定し、輸出量が総生産に占める割合を、右軸のグラフにしている。30年前の1989年に0.5%程度だったものが、2003年に1%越え、2010年に2%越え、2015年に3%越え、2017年に4%越え、2018年にほぼ5%と加速度的に増え、30年で10倍になった。さらに30年後の2050年には、輸出比率は30-50%になるのではないかと考える。

日本酒生産者にとって、輸出の重要性は今後さらに高まる。

(text = t.kita)